

報 告

食事場面における1, 2歳児と養育者の
対立的相互作用：家庭と保育園の比較から河原 紀子¹⁾, 根ヶ山光一²⁾

〔論文要旨〕

本研究では、食事場面における1, 2歳児と養育者の対立的相互作用に注目し、家庭と保育園における違いと発達的变化を明らかにすることを目的とした。乳幼児21名（生後11～28か月）とその親および保育者を対象に各場面の観察を行った。その結果、19か月未満では、保育園より家庭の方が受動的摂食や拒否行動が多く、その出現傾向は食事の前半と後半では異なっていた。19か月以上では、家庭でのみ1分以上続く泣きが見られ、そのきっかけは親子の確執であることが示唆された。これらより、1, 2歳児の拒否行動には2つのタイプがあり、対立的相互作用の発達について行為主体としての自己の発達との関連で考察された。

Key words：1, 2歳児, 家庭, 保育園, 対立的相互作用, 拒否行動

I. 問 題

食するという行動は、人間の生命と健康を支えるうえで不可欠であり、生涯を通して、人間生活の基礎となる行動である。とりわけ、発達初期における食行動は人間発達の根幹を支える非常に重要な営みである。

実際の食事場面では、必要なものを必要なだけ、適切な仕方で食べさせたいという養育者の意図と、好きなものを好きなだけ、自分の思ったように食べたいという子どもの意図・能動性が存在するため、子どもと養育者の間に対立や葛藤、調整や協力といったさまざまな相互作用が生じやすい。特に、食べさせてもらうことから自分で食べるへと移行していく1, 2歳ごろは、自己主張や反抗行動が顕著となる時期であり¹⁾、その対処方法が子育てや保育における課題となっている^{2,3)}。

近年、親以外による乳幼児の保育・養育が増加し⁴⁾、

家庭と保育園における子どもの行動の相互関連性について検討されてきた⁵⁻⁸⁾。中でも、遊び場面や定常場面において、1, 2歳児は保育者よりも親に対してより多くの泣きや怒りといった否定的行動を示すとされている⁸⁻¹⁰⁾。1, 2歳という発達初期において、子どもは家庭と保育園という異なる場面で、親および保育者と異なるやりとりを展開しており、このことは、子どもの行動や心理的特性を多面的に理解することの重要性を示している。

1, 2歳の時期における食事場面の相互作用に焦点を当てた研究は非常に限られているが、その中で、1歳前後から母親に食べさせてもらうことに対する子どもの拒否が多くなるという知見^{11,12)}や食べることを拒否する1, 2歳児に対し保育者は月齢によって対応を変え、工夫している¹³⁾などの重要な指摘もある。しかし、先行研究では家庭か保育園のいずれか一方を対象にしており、「自分で食べる」という食の自立に向け

Negative Toddler-caretaker Interactions during Feeding : A Comparison between Home and Day Nursery [2525]

Noriko KAWAHARA, Koichi NEGAYAMA

受付 13. 4. 19

1) 共立女子大学家政学部（研究職）

採用 14. 5. 19

2) 早稲田大学人間科学学術院・応用脳科学研究所（研究職）

別刷請求先：河原紀子 共立女子大学家政学部 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-27

Tel/Fax : 03-3237-5882

て重要なこの時期に、子どもが家庭と保育園それぞれの食事場面において、養育者とどのような相互作用を展開しているのかについては明らかにされていない。

そこで本研究では、食事場面における1, 2歳児と養育者の対立的相互作用に注目し、家庭と保育園という文脈によってそれらにどのような違いがみられるのか、またそれらにどのような発達的特徴があるのか明らかにすることを目的とした。そのために、養育者の食の供給（摂食促し）に対する受容と拒否・泣きおよび食事の進行に伴うそれらの行動変化等について検討した。その際、研究の方法論として、本研究では従来の数量的分析だけでなく、「一回的、個性的現象」が持つ意味を重視し、多様な要因の同時的把握および要因間の関係性の力動的把握ができる質的データ¹⁴⁾を採用した。このような数量的データと質的データの効果的な組み合わせにより、1, 2歳児と養育者における対立的相互作用の全体像の把握を試みるものである。

II. 対象と方法

1. 観察対象者

公立および私立の認可保育園および自治体に認可された家庭的保育室に通う、生後11～28か月の乳幼児21名（平均19.3±4.9か月：うち男児13名、女児8名；第1子14名、第2子以降7名）とその親および担当保育者を観察対象者とした。観察の協力が得られた保育園は8園、家庭的保育室は1室であった。

本研究の実施にあたって、自治体の所轄課程経由であるいは保育園・保育室を通じて園児の家庭に依頼して、文書と口頭により研究目的・方法について説明し、協力を申し出た家庭を対象にした。観察に際し、研究目的・方法、研究結果を公表する際の匿名性、研究参加・辞退の自由、データ削除を要求できることの説明を行い、書面による同意を得た。

また、対象児は保育園における0歳児ないしは1歳児クラスに所属し、食事場面の観察時、認可保育園における子ども対保育者比の基準（0歳児クラス：3対1、1歳児クラス：6対1）ないしは家庭的保育室における子ども対保育者比の基準（3対1）を概ね満たしていた。これらの対象児の属性を表1に示した。

一方、家庭では2名（G, I）のみ、対象児ときょうだい対親、つまり子ども対親の比率が2：1であったが、その他の対象児はすべて、子ども（きょうだいを含む）に対する親の比率は1以上であった。

表1 対象児の属性

対象児	所属園	月齢	性別	出生順位	所属クラス
A	C 保育園	11	男	1	0歳児
B	B 保育園	12	女	2	0歳児
C	D 保育園	12	男	1	0歳児
D	D 保育園	14	男	1	0歳児
E	D 保育園	16	女	1	0歳児
F	A 保育園	17	女	4	1歳児
G	A 保育園	17	男	2	1歳児
H	E 保育園	17	女	2	1歳児
I	A 保育園	18	女	2	1歳児
J	D 保育園	18	男	1	0歳児
K	F 保育園	19	女	1	1歳児
L	G 保育園	19	男	1	1歳児
M	H 保育園	20	男	1	1歳児
N	I 家庭的保育室	20	男	1	注)
O	H 保育園	21	男	1	1歳児
P	E 保育園	23	男	4	1歳児
Q	E 保育園	24	男	1	1歳児
R	E 保育園	24	男	3	1歳児
S	I 家庭的保育室	24	女	1	注)
T	H 保育園	28	男	1	1歳児
U	H 保育園	28	女	1	1歳児

注) 対象となった家庭的保育室は、子どもの定員3名の小規模保育のためクラス編成はなかった。

2. 観察の手続き

2004年8月～2005年11月の期間に、保育園と家庭における対象者の日常の昼食場面の行動観察を各1回行った。家庭と保育園の観察の間隔は、原則1週間以内とした。保育園では、登園から通常は午睡（入眠）まで、家庭では、休日（週末）の、保育園における観察時間に相当する時間帯に、1名の観察者が1台のデジタルビデオカメラ（SONY DCR-TRV10など）にて連続撮影を行った。いずれの場面でも、観察者は対象者の動きにできるだけ支障のないように心がけると同時に、対象者の行動や表情が捉えられるようビデオカメラを手に持ち、適宜移動しながら撮影した。また、各場面ともできるだけ日常の様子を見せていただくようお願いした。

3. 分析の方法と視点

観察データのうち、「食べ物が最初に提供された時点から、子どもが席を立つ時点ないしは食器がすべて片づけられる時点のうち早い方まで」を食事場面と定義し、これに合致する場面を抽出した。そのうえで、以下に示した(1)～(5)の行動・状況について

は数量的な分析を行い、そのうち(1)受動的摂食、(2)拒否行動、(3)家庭における共食状況の分析にはSPSS Ver19 for Windowsを用い、有意水準を5%として t 検定を行った。(6)のエピソード分析では「一回的、個性的現象」を重視した質的分析を行った。対象児の時期区分について(7)に示した。

(1) 受動的摂食

養育者の摂食促しに子どもが応じて食べ物を口に入れた場合を受動的摂食とし、それらの出現回数をカウントした。なお、子どもが養育者の摂食促しによってではなく自らの手または道具で食べる行動は今回の分析対象から除外した。

(2) 拒否行動

養育者の摂食促しに対し、子どもが顔を背ける、首を振る、のけぞる、養育者の手を払いのけるなどの身体的表現および「イヤ」、「イラナイ」などの言語的表現を拒否行動とし、それらの出現回数をカウントした。

(3) 家庭における共食状況

養育者の関与の程度を捉える一つの指標として、家庭で親が子どもと一緒に自身の食事を摂っていた(=共食)か、その場に同席し介助等を行うのみだったかを、対象児ごとに調べた。

(4) 食事の進行状況

食事の進行、すなわち空腹・満腹状況に伴う受動的摂食や拒否行動の出現傾向を検討するために、子どもが1回の食事で食べ物を口に入れた合計回数と所要時間の両方を考慮して、食事の前半と後半に区分した。例えば、食事の所要時間が25分、食べ物を口に入れた合計が50回の場合、その回数の半分である25回目に食べ物を口に入れた時間(食事開始から10分30秒)までを食事の前半、残りを食事の後半(14分30秒)と区分した。

(5) 泣き

根ヶ山ら⁹⁾を参考に、養育者の働きかけに対する拒否や抵抗に基づく泣きのみを取り上げ、その出現回数および泣きの長さ(持続時間)を調べた。

(6) エピソード分析

子どもが拒否行動を示した時点から、その相互作用の開始まで遡り、拒否行動を含む相互作用の終了までをひとまとまりのエピソードとして、映像データの質的分析支援ソフト Mivurix¹⁵⁾を使用してカットアップし、その映像を繰り返し見ることによって子どもの拒否行動の特徴とそれに対する養育者の対応の詳細について時系列に沿って記述した。

(7) 対象児の時期区分

1, 2歳児と養育者の相互作用における発達の特徴を捉えるために、11~18か月の子ども10名(平均月齢15.2)を19か月未満、それ以後の19~28か月の子ども11名(平均月齢22.7)を19か月以上として時期区分した。その理由は、1歳後半から自他それぞれが個別の視点を持つ主体として認識されるようになる¹⁶⁾とともに、自分が自分であるとの理解を示す鏡像自己認知が達成される¹⁷⁾ためである。

Ⅲ. 結 果

観察データのうち、食事場面の定義に合致する全対象児の所要時間の合計は、家庭では8時間29分(平均24分15秒)、保育園では12時間21分(35分15秒)であった。これらの映像を分析対象とした。

1. 受動的摂食と拒否行動

最初に、家庭と保育園の食事場面における子どもと養育者の相互作用の全体像とその発達の変化を把握するために、養育者の摂食促しに対する受容と拒否の出現頻度について検討した。家庭と保育園では食事の所要時間が異なるため、1時間当たりの出現回数を算出した。まず養育者の摂食促しに応じて食べ物を口に入れた場合、すなわち受動的摂食の出現頻度について、対応のある t 検定を行ったところ、19か月未満では保育園より家庭で有意に多かったが($t(9) = -2.799$, $p < .05$), 19か月以上では有意差はみられなかった($t(10) = -1.803$, $n.s.$, 図1)。同様に、拒否行動の出現率も19か月未満では保育園より家庭で有意に多かったが($t(9) = -3.465$, $p < .01$), 19か月以上では有意差はみられなかった($t(10) = -1.738$, $n.s.$, 図2)。

実際に、保育園では食事の大半を自分で食べていたのに対し、家庭では親が食べさせようと差し出すスプーンを繰り返し拒否し、器に手を伸ばす(自分で食べようとする)行動を示した事例がみられた。

2. 養育者の摂食促しに占める子どもの拒否行動の割合

次に、養育者の摂食促しに占める子どもの拒否行動の割合(拒否行動/[受動的摂食+拒否行動])について検討した。その結果、摂食促しに占める拒否行動の割合は、19か月未満の家庭では0.30、同じく保育園では0.32、19か月以上の家庭では0.41、同じく保育園では0.36であった。家庭と保育園において、またいずれ

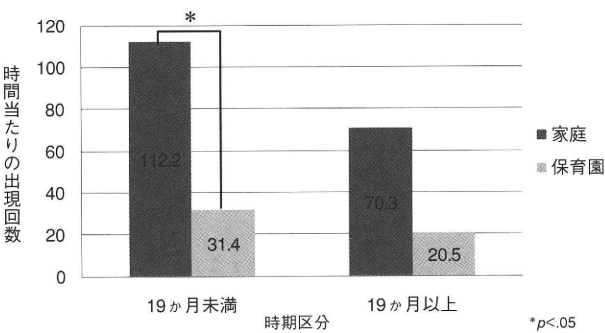


図1 受動的摂食の出現率

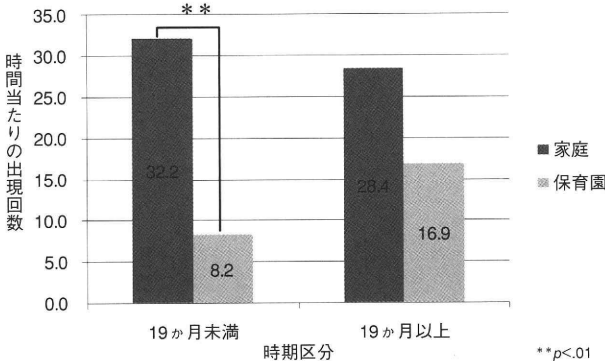


図2 拒否行動の出現率

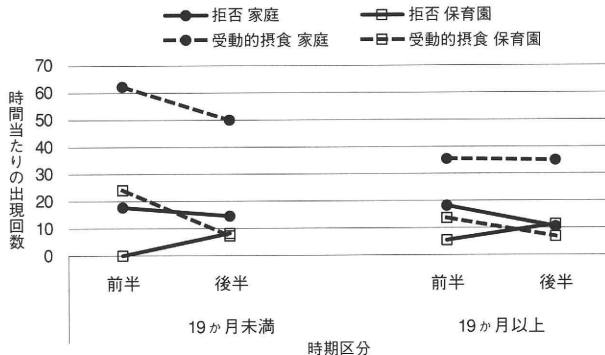


図3 受動的摂食と拒否の出現率

の時期においても摂食促しに占める拒否行動の割合に違いがみられなかった。

3. 家庭における共食の状況

1. 2の結果を受けて、家庭における親の共食状況と子どもの受動的摂食や拒否行動の出現に違いがみられるかを検討した。親子が共食していた事例は、19か月未満では6名、19か月以上では8名（計14名）、共食していなかった事例は、19か月未満では4名、19か月以上では3名（計7名）であった。事例数が少ないため、21名全体で対応のないt検定を行ったところ、共食している場合より共食していない方が子どもの受

動的摂食が多い傾向にあり ($t(20) = -1.953, p < .1$), 拒否行動は有意に多かった ($t(20) = -2.340, p < .05$)。

4. 食事の進行に伴う行動変化

さらに食事の進行、すなわち子どもの空腹・満腹状況に伴って受動的摂食や拒否行動の出現傾向がどのように変化するかを検討した。その結果、受動的摂食が相対的には食事の前半に多く後半に少ないという傾向は、いずれの時期においても、また家庭と保育園ともに、概ね共通していた（図3）。ただし、19か月未満の保育園では、食事の前半には受動的摂食のみで拒否はみられず、食事の後半にのみ拒否が出現していた。実際、保育園では保育者の摂食促しを子どもが数回拒否した後に、保育者が食事を終了にするといった展開が複数事例でみられた。それに対し、家庭ではいずれの時期も、食事の進行に伴って拒否行動は相対的に減少した。

5. 泣き

拒否よりも強いネガティブな情動が伴う泣きについて、その出現回数を、泣きの継続時間を30秒ごとに3区分して表2に示した。その結果、泣きは保育園ではほとんど出現せず、家庭で相対的に多く出現していた。また、泣きの持続時間を見ると、19か月未満の家庭および保育園では、30秒未満の泣きがほとんどであったが、19か月以上の家庭でのみ1分以上続く泣きが出現した。

6. エピソード分析

19か月以上の家庭でみられた泣きのうち、最も長く泣いた事例（L児・19か月）に注目し、そのきっかけとなったエピソードの詳細を取り上げ、それを同一児の保育園における保育者との相互作用と対比させて捉えることとする（表3）。

エピソード1で、まず注目されるのは、「ハムだけ食べたい」というL児の要求に母親が応じなかったため（下線部②③）、L児が食事を終了しようとした

表2 泣きの出現回数

範囲 (秒)	19か月未満		19か月以上	
	家庭	保育園	家庭	保育園
0～29	7	0	8	4
30～59	1	0	1	0
60～1,207	0	0	3	0
計	8	0	12	4

表3 家庭と保育園における子どもの拒否行動を含むエピソード

【エピソード1：L児 19か月／家庭：食事開始時】

L児がテーブルにあるサンドウィッチに手を伸ばし、母親が「いただきます、どうぞ。」と言って昼食が始まる。L児が「マーマーノー。」と言って母親の分も取ろうとすると、「ママは後で食べる。」とその手を制する。①L児はサンドウィッチを少し口に入れ「アマイ。」と言ってお皿に置こうとする。母親は「甘くないよ、失礼ね。」と言ってそのサンドウィッチを取り、L児に差し出すと、L児は「アマイ。」と言って顔をそむける。母親が「食べないの？ママ食べちゃうよ、じゃあ、ママ食べちゃうかな〜。」と言いつつも、「はい。」と言って再度L児にサンドウィッチを差し出す。L児は「イライナイ。」と言って顔をそむけるが、②L児自ら皿から別のサンドウィッチを取り、ハムだけ取り出そうとするので、母親は「ダメ、これ一緒に食べんの。」と制止し、ハムを戻してサンドウィッチを差し出す。L児は「ハム。」と言ってそれを一口食べ、その後しばらく食べている。

約1分後、食べていたサンドウィッチを口から吐き出すので、母親が「出さない。」と言って制止した後、③L児はパンに挟んであるハムだけ取り出し、口に入れようとしたところで、母親は「ハムだけ食べない、ダメ。」とハムを取り上げ、「全部一緒に食べるの、メッ、一緒。」とハムをパンに挟む。L児はぐずりながら母親の腕をつかんでいると、母親は「ヤダ、ヤダ。」、「一緒。」、「べーしない。」などと言ってサンドウィッチをL児に差し出すが、L児は食べない。母親は「サンドウィッチ食べないとパイナップルとかないよ。」と言うが、L児はそばに置いてあった牛乳を飲む。その後、④L児は「ナイナイ、ナイナイ。」と言ってサンドウィッチにラップをかけようとする。母親が「いらないの？Lちゃん、ごはん、これしかないよ。」とそのラップを取り、「ごはん食べないの？ごはん食べないの？」と言うと、L児は「ナイナイ。」と言ってまたラップを取ってかけようとする。⑤母親は「いいよ、じゃあママ食べるから。」と言って母親が一口食べる。L児がサンドウィッチを食べている母親の腕にまとわりつくような格好で、そのサンドウィッチに手を伸ばそうとすると、母親は「Lちゃん、いらないんでしょ？」と言うと、L児の動きが止まる。さらに「食べるの？」と母親がサンドウィッチを差し出すと、L児は「ナイナイ。」と言って一歩下がる。「じゃあ、いいや。」と母親は言う。この後、L児はほとんど食事をとらず、ぐずり始め、10分以上泣き続けることとなる。

【エピソード2：L児 19か月／保育園：食事後半】

L児が手でスプーン碗の食べ物を取ろうとすると、保育者が「手手（おてて）で食べない。」と言いつつも、スプーンの具をすくって差し出す。L児は一度口へ入れるが、舌で押し出し食べないので、保育者は「あれ〜？」と言った後、スプーンを差し出し続けながら①「あ、うさぎさんの大好きなニンジンさん、昆布も入ってるから、パッコーンしよ、パッコーン。」と言うと、L児は手でスプーン碗の食べ物を取ろうとする。保育者はそれをさせないように笑いながら遠ざけつつ「あっ、あーん。」と勢いつけて促すように言って差し出すと、L児は食べる。②保育者は「あーすごい、D先生食べたよー。」と他者にも伝え（D先生も「すごい。」と言う）、「Lくん、べーしなくてもおいしいでしょ。」と言う。

ことである（下線部④）。次に、そうしたにもかかわらず、L児がサンドウィッチを食べたようなそぶりを見せたので、母親がやや挑発的な態度で摂食を促すと、L児は食べたいけれどもあえて拒否していた（下線部⑤）。ここから、単に食べるのではなく、思い通りの食べ方でなければ、食べること自体を拒否・終了しようとするL児の思いが読み取れる。一方、母親はL児の思い通りの食べ方を許すことはできないが、食事は摂らせたいという意図を持っている。このように、親子が互いに譲れず確執となって、その後のL児の長い泣きへとつながっていた。しかも、昼食開始早々、母親の作った食事に対するL児の否定的なコメント（下線部①）は、母親の苛立ちを募らせ、一連の相互作用に少なからず影響を与えていたであろう。1分以上続く泣きがみられた他の事例でも、食事の前半に子どもの思いに反する親の対応がきっかけで子どもは食器をひっくり返し、泣き続けたために食事が中断・終了してしまうエピソードもあった（S児・24か月）。

それに対し保育園では、エピソード2の下線部①にみられるように、「うさぎさんの大好きなニンジンさん」などと食べ物を意味づけ、食べたい気持ちにさせ

る楽しそうな言葉かけにより、L児は拒否していた食べ物を受け入れ、L児が食べると保育者は他者の視線を意識させながら褒めるというように（下線部②）、拒否を含みつつも調和的な相互作用であった。

IV. 考 察

以上より、19か月未満では保育園よりも家庭で拒否行動が多く、その傾向は家庭での摂食促し（受動的摂食＋拒否行動）が多く、親が共食しないで子どもの食事に関心を向けられる場合に顕著であった。つまり、19か月未満では、親の関与が多いことが子どもの拒否行動の機会も多くしている可能性が考えられる。また、泣きはいずれの時期も保育園より家庭で相対的に多かったが、19か月以上の家庭でのみ1分以上続く長い泣きがみられ、そのきっかけの一つに親子の確執とも言える対立的相互作用が関わっていることが示唆された。

家庭では食事の作り手と食べさせ手がいずれも親であるのに対し、保育園では食事の作り手は調理師・栄養士、食べさせ手は保育者である。そのため、自分が作った食事に対し子どもが拒否をしたり、吐き出した

り、ひっくり返されたりすると、それによる親の落胆や苛立ちは保育者よりもはるかに大きいだろう。また、保育者が他人の子どもに客観的な立場で対応するのと異なり、親にはわが子の食に対する期待があると同時に、子どもも保育者に対しては見せないような甘えを親には見せることが指摘されている⁹⁾。親子であるがゆえに互いに譲れない心理状況がこういった確執を生じさせる一つの要因となったのではないかと推測される。

本研究の結果から、食事場面における1, 2歳児の拒否行動には次の2種類あることが示唆された。一つは、保育園で食事の後半にみられた「満腹・終了」を意味する拒否で、いわば文脈に適合した拒否である。もう一つは、家庭で食事の前半にみられた拒否である。これは、子どもがまだ空腹であるか、少なくとも食事を十分には摂っていないにもかかわらず出現するもので、親には食事を与えたいという意図があるため、その拒否を受け入れ難く、また子どもも食事を摂りたくないわけではないといった相矛盾する両価的な拒否であることが特徴である。

以下では、この両価的な拒否行動について、行為主体としての自己の発達との関連で考察を加えたい。川田ら¹²⁾によれば、発達的には1歳前ごろから、受動的摂食に対する拒否がそれ以前に比べ有意に増加する。その背景には、これまで食べさせてもらっていた子どもが今度は母親に“食べさせる”行動を示すようになり、たとえ同じ食べ物であっても食べさせてもらうのではなく、自ら食べようとする行動がみられ始めることと関係していると述べている。河原も同様の特徴について指摘しており¹³⁾、19か月未満の家庭で摂食促しが多いと拒否行動が多いという本研究の結果も先行研究と一致するものである。従って、この拒否行動は、受動的摂食ではなく自らが「食べる」という行為主体であることを主張する「食の主体性を主張する拒否」であると言えるのではないかと考えられる。

それに対し、19か月以上になると、食べ物を口に入れる行為主体は誰かという問題から、その状況・場面で何をどのように食べるか、それを誰が決定するかという問題に移行すると思われる。木下は、1歳後半になると自己と他者はそれぞれ個別の視点を持つ行為主体であると認識されるようになるとともに、自ら意図を持って行為するようになると指摘している¹⁸⁾。それは、一方では、養育者の「食べてもらいたい」という意図を理解し、一度拒否しても楽しい雰囲気や褒める

といった対応によって、それに積極的に応じる保育園でみられたようなポジティブな側面として現れるが、他方で、家庭での親子の対立から互いに譲れない確執のような事態へと展開するネガティブな側面としても現れると推測される。つまり、19か月以上では、子どもの意図した行動を親が受け入れないとき、あるいは子どもの意図に反する対応であった場合などに、子どもは親の意図（食べてもらいたい）を理解しつつも、あえて相手を不快にさせたり、ダメージを与えるような行動（例、食事の拒絶、食器をひっくり返す）をとることによって抵抗や抗議の意思を示すようになるのではないかと考えられる。これは、「相手へのダメージを志向する拒否」であり、このタイプの拒否が親子の確執につながる可能性が示唆される。

以上のように、食は単に空腹を満たすという生存のために必要な手段というだけでなく、食を通じて子どもの自己主張が表現される重要な営みである。家庭と保育園の食事場面における子どもの拒否行動には、行為主体としての自己の発達の特徴が顕著に反映されており、子どもと養育者の相互作用を理解するうえで非常に豊かなメッセージを含んでいる。従って、家庭と保育園、それぞれの場面で、子どもの拒否行動が発するメッセージに耳を傾けることがこの時期の保育・子育てにおいて求められる。

V. 研究の限界

本研究では、家庭と保育園の両方の観察に協力を得ることが容易でなかったため、対象者が少なく、観察回数も家庭と保育園各1回であった。そのため、本研究で示した拒否行動以外の多様なタイプや個人差については言及できなかった。今後は、横断的データだけでなく、少数事例であっても縦断的なデータと組み合わせることや養育者へのインタビューにより豊かな情報収集を行うことによって、対立的相互作用の多様性や発達的特徴について検討することが必要である。

本研究の一部は、日本発達心理学会第24回大会（東京）において発表された。

本研究の一部は、2008～2010年度文部科学省科学研究費・基盤研究（B）（子どもにおける食発達の総合的研究：養育者との葛藤・調整に注目して 課題番号20330140 研究代表者：根ヶ山光一）の補助を受けて行われたものである。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 坂上裕子. 子どもの反抗期における母親の発達歩行開始期の母子の共変化過程. 東京：風間書房, 2005.
- 2) 神田英夫. 0歳から3歳 保育・子育てと発達研究をむすぶ. 草土文化, 1997.
- 3) 氏家達夫, 高濱裕子編著. 親子関係の生涯発達心理学. 東京：風間書房, 2011.
- 4) Belsky J, Rovine M. Nonmaternal care in the first year of life and security of infant-parent attachment. *Child Development* 1988 ; 59 : 157-167.
- 5) Bronfenbrenner U. The ecology of human development : Experiments by nature and design. Cambridge : Harvard University Press, 1979. (磯貝芳郎, 福富護訳. 人間発達の生態学. 東京：川島書店, 1996.)
- 6) Shpancer N. The home-daycare link : mapping children's new world order. *Early Childhood Research Quarterly* 2002 ; 17 : 374-392.
- 7) NICHD Early Child Care Research Network. Child care and child development : Results from the NICHD Study of early child care and youth development. New York : Guilford Press, 2005.
- 8) Ahnert L, Rickert H, Lamb ME. Shared caregiving : Comparisons between home and child-care settings. *Developmental Psychology* 2000 ; 36 : 339-351.
- 9) 根ヶ山光一, 河原紀子, 福川須美, 他. 家庭と保育園における乳幼児の行動比較：泣きを手がかりに. *こども環境学研究* 2008 ; 4 (3) : 41-47.
- 10) Deynoot-Schaub MJMG, Riksen-Walraven JM. Infants in group care : Their interactions with professional caregivers and parents across the second year of life. *Infant Behavior and Development* 2008 ; 31 : 181-189.
- 11) Negayama K. Weaning in Japan : A longitudinal study of mother and child behaviours during milk- and solid-feeding. *Early Developmental and Parenting* 2003 ; 2 : 29-37.
- 12) 川田 学, 塚田みちる, 川田暁子. 乳児期における自己主張性の発達と母親の対処行動の変容：食事場面における生後5ヶ月から15ヶ月までの縦断研究. *発達心理学研究* 2005 ; 16 (1) : 46-58.
- 13) 河原紀子. 食事場面における1～2歳児と保育者の対立と調整：相互交渉パターンの分析から. *保育学研究* 2004 ; 42 : 112-120.
- 14) やまだようこ. モデル構成をめざす現場心理学の方法論. やまだようこ編. *現場心理学の発想*. 東京：新曜社, 1997 : 161-186.
- 15) 荒川 歩. 映像データの質的分析の可能性：mivurixによる指折り行動の分析から. *質的心理学研究* 2005 ; 4 : 66-74.
- 16) 木下孝司. 認知発達研究からみた乳幼児研究の動向と今後の課題（発達部門（乳・幼児）, II わが国の最近1年間における教育心理学の研究動向と展望）. *教育心理学年報* 2006 ; 45 : 33-42.
- 17) Zazzo René. *Reflets de miroir et autres doubles*. Presses. Universitaires de France, 1993. (加藤義信訳. 鏡の心理学：自己像の発達. 京都：ミネルヴァ書房, 1999.)
- 18) 木下孝司. 幼児の「心」に気づくとき. 丸野俊一, 子安増生編著. 子どもが「こころ」に気づくとき. 京都：ミネルヴァ書房, 1998 : 33-55.

[Summary]

The purpose of this study was to compare toddlers' negative interactions during feeding with caretakers at home and at day nursery at mealtimes, and its developmental change. Twenty-one toddlers between 11 to 28 months old and their caretakers were observed in home and day nursery. Under 19 months, passive eating and refusal to eat were more frequent during feeding at home than in the nursery, and the frequency of the behaviors changed between the former and latter half of the meal. Crying bouts of over one minute were observed only in children over 19 months at home, and conflict with the parent appeared to be the cause of the cry. Based on these findings, toddlers' refusal behavior was classified into two types, and development of negative interactions was discussed from the perspective of the development of the child's self as agent.

[Key words]

toddler, home, day nursery, negative interaction, refusal behavior